

# 報 雜

## ◎人 事

勳八等 女 保 誠  
 敍勳七等授瑞寶章 (昭和16年  
 12月12日)  
 長谷井美善  
 敍從七位 (7月15日)  
 勳四等 根 岸 博  
 敍勳三等授瑞寶章 (9月8日)  
 勳五等 小 田 大 吉  
 敍勳四等授瑞寶章 (9月8日)  
 勳六等 林 香 苗  
 敍勳五等授瑞寶章 (9月8日)  
 從七位 末 永 邦 忠  
 敍正七位 (8月15日)  
 正七位 淺 越 嘉 威  
 敍從六位 (8月15日)

○廣瀬眞治君 神戸市須磨區關守町3ノ55へ  
 轉居  
 ○大森 誠君 茨城縣衛生課長として轉勤  
 ○高田二郎君 廣島縣吳市廣町廣海軍共済組合  
 病院外科へ轉勤  
 ○藤原公平君 天津法界1號路馬太夫病院へ轉  
 勤  
 ○岡本 繁君 廣島市上柳町64ノ1へ轉居  
 ○望月章次君 大阪市住吉區田邊東ノ町8丁目  
 11へ轉居  
 ○中島達二君 新京市大和通滿鐵新京醫院内科  
 醫長として轉勤  
 ○木田 恵三君 津山市椿高下58へ轉居

## 滿洲國興安北省驅徽工作班報告

江原敏夫 小原美夫 大瀬戸弘隆  
 河村雅雄 田中頼巳 松本 節

### 緒 言

滿洲國興安北省の依頼により學生の諸君5名と興安北省西新巴爾旗に於ける蒙古人の驅徽工作に出發致しましたのは昭和16年6月14日でありました。8月17日歸校、この間約2箇月、實地診療に従事しましたのは約6週間餘りであります。出發にあたり種々研究準備を致して参りましたが得たる收穫は實に微々たるもので此處に發表する事に聊か汗顔を感じず次第であります、これが理由も種々ありますが其の最大のものは、1) 現地の事情に何等豫備知識のなかつた事、即ち我々は現地に於て同一行動を取るものとして準備を行つて

ゐた所、各自別行動を取る様餘義なくされた事、2) 言語が少しも通じなく、少し手眞似を交じへ意志が通じ始めた時省の命令にて引上げる事に成つた事、3) 驅徽工作が案外多忙を極めた事等であります。

先づ我々の赴いた土地を説明致しますと、興安北省は滿洲國の最北西端でソビエト及び外蒙に接してゐます。省廳の所在地は海拉爾市で人口約3—6萬と稱せられ活潑な新興都市であります。省の下に旗があり我々の赴いたのは西新巴爾旗であります。海拉爾市より約汽車で5時間國境の街滿州里に宿みます。此處は人口約7000人の靜かな



めるのは確かに有難く感じたものの1つであつた。

此處で一寸蒙古人の食糧に就て述べたい。彼等の主食となるものは「バイメン」(メリケン粉)及び羊肉である。其の他牛乳及び牛乳加工品、茶等であり、野菜は食はない。食いたくも無いからである。然らば「ビタミン」の攝取は何によるかといふに主として羊の内臓によると考へられる。即ち彼等は野菜なしの生活に既に適應が出来てゐるものと思はれる。不思議に「ビタミン」缺乏による疾患を見なかつた。嗜好品としては煙草及び酒がある。殊に煙草は10歳位になれば之をたしなむ。酒は馬乳酒を最も多く用ひるらしい。其の他白酒(麥)、老酒(粟)等がある。飲料水は専ら河水を使用し、たまたま井戸水等存在しても之を用ひない。彼等に言はしむれば井戸水は味がなく、河水は美味との事である。

其の他衣食住に關しては同行の松本により岡山醫學同窓會報第10卷第3號に發表されてゐるか

ら参照して戴きたい。

驅徴成績 (徴毒血清反應には井出氏法を用ふ)

第1表に示す如く總數4365名の檢診中1922名即ち約44%の徴毒陽性率を見た。各班の成績をみるに最高60%最低25%である。班により斯の如き差のあるのは以下の理由に基くものである。即ち第2班、第3班は昨年既に驅徴工作を實施せし所である。

第 1 表

場 所 及 ビ 檢 査 員	檢 査 人 員	井 出 氏 反 應 陽 性 者 數	陽 性 者 100 分 率
第1班 ヤ ス ト 松 本	376	227	60.4%
第2班 アル シ ャ ン 河 村	762	194	25.5%
第3班 ア ト ニ シ ロ 田 中	666	231	34.7%
第4班 ヘ ス コ ホ ン ド ル 大 瀬 戸	1034	508	46.9%
第5班 バ イ ン デ ル ス 小 原	1477	762	51.6%
計	4365	1922	44.0%

以上の成績を男女及び「ラマ僧」の3種に分類して考察するに第2表の如き成績である。即ち最

第 2 表

分 類	「ラ マ 僧」		男 子		女 子		計	
	+	-	+	-	+	-	+	-
井出氏反應								
第 1 班	16	28	35	38	176	83	227	149
第 2 班	25	108	35	135	134	325	194	568
第 3 班	79	94	55	98	97	242	231	435
第 4 班	113	109	96	194	299	273	508	576
第 5 班	139	157	138	207	485	351	762	715
計	372	496	359	672	1191	1274	1922	2442
陽 性 率	42.9%		34.8%		48.3%		44.0%	

第 3 表

分 類	「ラ マ 僧」		男 子		女 子		計	
	+	-	+	-	+	-	+	-
年 齡								
井出氏反應								
1 — 10	21	25	36	136	35	195	92	306
11 — 20	65	109	62	102	208	260	335	471
21 — 30	69	80	49	71	292	163	410	314
31 — 40	73	104	74	83	263	210	410	397
41 — 50	79	95	58	125	193	263	330	423
51 — 60	49	47	46	90	135	137	230	394
61 以上	18	46	34	65	74	106	126	217

高陽性率を示すのは女の 48.3%, 次で「ラマ僧」の 42.9%, 最低は男の 34.8% である。次に男女, 「ラマ僧」等を年齢別に見るに第 3 表の如き成績を得た。男に於ては 30 代最多にして次で 20, 40, 10 歳代の順である。「ラマ僧」に於ては 50, 20, 40 30, 10 歳代の順序である。女子に於ては 20 歳代断然多く 64% の陽性率を示せり。次で 30, 40, 50, 10 歳代の順序である。「ラマ僧」男女を通じて最高陽性率を示すのは 20 歳代にて、次で 30, 40, 10, 50, 60 歳代の順序に減少せり。

我々は以上の梅毒患者約 1900 名中「サルベルサン」注射に差支なき患者に就き治療を行へり。注射劑として Normal-Neo-Tanvarsan を使用し、約 1 週間に 1 回の割合に注射を行つた。昨年既に治療を受け注射に對し恐怖心の無き所は容易に診療を進める事が出来たが、今年始めて行ふ地にあつては種々困難に遭遇した。殊に屢々遭遇したのは注射に對する恐怖による「ヒステリー様」發作である。始めは「サルベルサン」の副作用と考へてみたが或る患者に於ては注射針を皮膚にさしたのみで發作を起した。之等事實より考へ恐怖によるものと推察される。この發作は大部分に於て日陰に寝かしておけば 1 時間足らずで覺醒した。

次に「ラマ僧」の存在が問題である。彼等蒙古人の間にあつて「ラマ僧」は絶對的存在であると同時に醫者である。であるから我々は「ラマ僧」にとつては敵である。爲に注射に對し種々惡質の「デマ」を飛ばすのである。これが治療の障碍と成つた事も多大である。

注射回数 10 回に至れば血液の再検査を行ひ以て我々の治療効果を見る豫定の所突然省の命令により驅微工作を中止する事になり之を爲し得なかつたのは實に残念であつた。併し少ないもので 6 回多い者で 9 回注射を行つてゐる。勿論以上の如き治療で効果を云々するのは間違つてゐるが、我々の努力により省の驅微工作が順調に進行すれば我々今回の目的も達せられると思ふ。

以上我々驅微工作の實情に就き述べて來たが、何が爲に蒙古人間に斯くも梅毒が蔓延してゐるかに就き考察したいと思ふ。勿論其の原因となるべきものも種々あると考へるが、この内、1) 教育、2) 貞操、3) 「ラマ僧」の 3 つが重大なる原因と考へられる。教育は殆ど無きに等しい。字を讀み書き出来る者は 1 部落に 2, 3 人位である。學校は アルタイムン にあり、約 100 人程が初等教育を受けてゐる。其の他大きな部落には時々日本の寺小居式の教育機關を持つに過ぎない。従つて道徳觀念殊に貞操觀念は全く男女共零である。我々日本人には全く理解し難く、我々の云ふ事も彼等には全く通じない。次の様な笑話がある。我々同行の某君に佐領(村長格)が女を世話すると言ふ。勿論同君は一言の下に之を退けたが、同佐領は蒙古女が嫌かと云ふ。同君は日本に於ては斯る行爲が罪に成ると言つて説明したが之が如何しても佐領に了解されないと言ふのである。次に見逃がす事の出来ないのは「ラマ僧」の存在である。彼等は蒙古人間では絶大な勢力があり、轉々として包から包を訪問し食事を行ひ宿泊するのである。即ち性病蔓延の根源と云ふも過言でないと思はれる。勿論彼等を撲滅する事は不可能事である。茲に於て教育の普及が 1 日もゆるがせに出来ない事を強調したい。

#### 梅毒の出生兒に及ぼす影響 松本 (ヤスト)

ヤスト 地區の蒙古人は其の民族中最も劣等で文字の書ける者殆ど無く、計算も餘り出来ない。併し妊娠に就ては月經が止つてから約 280 日にて出産すると云ふ大體の感じを持つてゐるらしく、早く産れた、おそく産れた等云ひ、幾箇月早く産れたと云ふ。この爲問診を行ふ事が出来た。併し何分言葉が不自由な爲充分確實なものとは云ひ難い。

問診を行つた患者数は 109 名でこの中子供を有するもの 61 名無い者 48 名である。子供は 6 人を有する者が最高で唯 1 名あり。5 人有する者 3 名、4 人を有する者 1 名、以下順次 5 名、16 名、35 名

と成る。即ち第4表に示す如く子供總數は107名である。

第4表 母子關係

子 供 數	母 數
6	1
5	3
4	1
3	5
2	16
1	35
0	48

次に流産を経験せるものは109名中10名で、流産回數は12回なり。早産を経験せるものは48名其の數は108回に及んでゐる。

妊娠總數は246回でこれを分類すると第5表の如くである。即ち108回は早産、12回は流産、18名は梅毒陽性兒、99名が健康兒である。

第5表 妊娠及び出産狀況

妊 娠 數	246	100分率
早 産	108	43.5
流 産	12	4.9
井出氏反應陽性兒	18	7.2
井出氏反應陰性兒	99	40.2
生長後死亡兒	9	4.2

第7表 血 球 沈 降 速 度

♂	1 時 間	1 3 3 3 14 3 3 3 2 2 4 2 2 3 5 5 2 3 2 2
	2 時 間	3 5 4 4 20 4 4 4 3 3 6 3 3 4 6 10 3 5 3 4
	1 時 間	2 5 2 4 2 3 3 5 2 5 4 4 3 5 6 3 2 2
	2 時 間	4 6 3 6 3 4 4 10 3 15 5 8 5 7 9 4 4
♀	1 時 間	4 2 4 3 2 3 5 3 4 2 2 1 3 4 5 4 6 8 5 6
	2 時 間	5 4 5 5 3 6 7 5 6 4 3 3 4 5 6 6 8 10 6 8
	1 時 間	1 4 2 3 6 1 4 7 2 12 35 4 3 3 4
	2 時 間	3 8 4 5 8 3 6 8 4 22 55 6 4 5 6

血液型 田中 (アトニシロ)

私等は800名の血液型を検査し得る檢液を準備して現地に行つたのであるが蒙古人は採血を恐れるし、又空氣乾燥の爲か檢液の封を切ると其の日の裡に蒸發し消失する等の種々惡條件のために僅

次に結婚年齢は第6表の如くで平均18歳である。

第6表 結婚年齢

32 Lj. 1	24 Lj. 3	19 Lj. 14
29 Lj. 3	23 Lj. 1	18 Lj. 17
27 Lj. 1	22 Lj. 3	17 Lj. 21
26 Lj. 1	21 Lj. 9	16 Lj. 12
25 Lj. 2	20 Lj. 10	15 Lj. 6
		14 Lj. 1

血球沈降速度 田中 (アトニシロ)

我々は蒙古人の結核の浸潤状態を調査する目的で「ツベルクリン」液と赤血球沈降速度測定器を用意してゐた。併し不幸にして蒙古人等の注射は相當なもので肝心の驅微の注射を施すのに精一杯の狀況なので宣撫工作の驅微の目的の爲マントー氏反應は中止するに到つた。8月近くなり蒙古人と親しくなつた頃血液中の悪い蟲を検査してやると言ひ梅毒患者の中で比較的注射を嫌はぬ者74名に赤血球沈降速度を試みた。梅毒患者なので赤血球沈降速度は速進してゐると、思つてやつて見たが、第7表の如くで、全く正常なものには驚した。

に149名しか検査し得なかつた。従つて両親と子供の血液の關係が調査し得なかつたのは残念である。其の成績は第8表に示す如くO型が斷然多數を占め約55%、次にB型、A型、A.B型の順序に減少してゐる。

第8表 血液型

血液型	A	B	A.B	O
男	8	25	8	49
女	9	14	2	34
計	17	39	10	83

## 身長、座高、胸圍 松本 (ヤスト)

この測定に供した蒙古人は大體生長の止つたものと思はれる20歳以上の男子19名、女子51名である。簡単に其の成績を述べる。即ち男子の平均身長は166.0cm、胸圍は89.2cm、座高89.0cmであり、女子に於ては身長152.7cm、胸圍81.7cm、座高80.0cmである。又男子17名中胸圍 $\geq$ 座高なる者11名、女子51名中胸圍 $\geq$ 座高なる者40名なり。次に胸圍 $\times 2 >$ 身長なる者は男子の總と女子51名中48名なり。以上の事實は胸圍が座高身長に比し大なる事を示すと思ふ。即ち男子の $\frac{\text{胸圍} \times 2}{\text{身長}} = 1.08$ ,  $\frac{\text{座高}}{\text{身長}} = 1.82$ , 女子の夫れは1.07, 1.90である。

## 體温及び血壓 大瀬戸、河村、松本

體温は大體午前10—11時に測定したり。男子223名、女子336名にて平均體温は男子36.8°C、女子37.0°Cを示してゐる。

血壓は270名に就き測定せしに第9表の如し。

第9表 血壓

年 齡	検査人員	平型最高	平均最低
10 — 19	29	104	67
20 — 29	51	113	73
30 — 39	69	111	74
40 — 49	69	116	75
50 — 59	52	125	83

即ちこの表より觀るに高年者に於て血壓は正常以下を示せり。彼等が肉食を主として攝るに拘はらず斯る結果を示したのは我々の豫想と一致せなかつた事實である。

## 氣候 小原 (ハブチュウ及びバイデルス)

氣候測定期間は7月1日より7月31日に至る

31日間である。時間を知るには自分の腕時計を使用した。最高、最低寒暖計は包の内外に1箇宛、別に包内に乾濕寒暖計を用意した。包内の氣温は包の天蓋の開き具合にて大いに異なる。定時常に測定し得なかつたのは多忙の爲測定時刻を失念したためである。又最低温度は朝、最高温度は夕方記入した。

得たる結果は第10表(次頁参照)に示す如し。即ち7月中は大體晴天が續き雨を伴つた日は僅に6日にて而も大部分は一時的のものであり。牧畜に必要な草の成長が悪く蒙古人は大變心配してゐた様であつた。

氣温の最も高かつたのは7月中旬で15日には39.5°Cを示してゐる。併し當日の最低温度は14.5°Cで其の差は25°Cであり、可成り温度差は甚だしい。我々就寢に際しては毛布3枚は決して離されなかつた。我々出發に際して可成氣候を心配し夏冬兩様の仕度をして居た。併しこの表でも知られる如く冬の仕度は必要が成かつた。夜分は丁度内地の10月頃に相當してゐる様に思ふ。氣温も想像程には高くなく、殊に日蔭に居れば常に風があり内地の土用よりは却つて涼ぎ良い位である。此點我々は大變助つた。

日出は大體午前4時頃、日没は午後9時頃であるが、黄昏及び曉が大變長く、すつかり暗くなるのは11時頃、夜の明け初めるのが午前3時頃である。時間的觀念が全く狂つて始めの間は一寸閉口した。

## 結 辭

以上是我々が約6週間に亙る現地生活により得ました收穫の大略であります。種々の惡條件の爲とは云へ何等纏つた成績を得る事が出来なかつたのは遺憾でありました。併し以上の記述により現地住民の實際を知る上に何等かの參考にでもなればと敢て筆を取つた次第であります。

第 10 表 氣 候

月 日	天 候	午前 7 時		午後 2 時		6 時		8 時		10 時		Max.		Min.	
		乾球	濕球	乾球	濕球	乾球	濕球	乾球	濕球	乾球	濕球	內	外	內	外
7. 1	晴	24°	18.5°	25.0°	29.5°	19.0°	31.0°		29°	19°	30°	32	35.5	21	16.5
7. 2	"	26.0°	18.0°	27.0°	30.0°	19.0°	32.0°		29°	19.5°	27°	33	36	20	14
7. 3	"	26°	19°	27.0°	31.0°	21.0°	33.0°		30.5°	20°	31°	31.5	35	20	13.5
7. 4	"	25°	17°	27.0°	30°	20.0°	32.0°		29.5°	19°	27°	31	35	20	15
7. 5	"	18.0°	16.0°	18°	24°	17°	26.0°	24°	16.5°	22°	20.5°	33	36.5	17	18
7. 6	"	20°	17.5°	19.0°	24°	20°	23°	24°	17°	23.5°	20.0°	27	29	20	13
7. 7	曇	20°	18°	23°	27°	20°	26°	28.5°	20°	27°	22.5°	27	29	15	12
7. 8	"	25°	20.5°	22.5°	27°	20°	26°		22.5°	18°	21°	30	28	15	15
7. 9	"	20.5°	19.5°	24°	30°	20°	33°	23°	19°	24°	30	27	29	13	16
7.10	"	26°	21.8°	27°	30°	21°	30.5°	27.5°	21°	26°	26.5°	31	29.5	16.5	13.5
7.11	"	25°	20.5°	28°	32°	21°	32°	32°	21°	29°	25.5°	32	32	19.5	15
7.12	"	23°	18°	21°	33°	21°	37°	33°	21°	29°	26°	35	37	22	14.5
7.13	"	28°	23°	27°	30°	17.5°	37°	32°	21.8°	31°	26°	38	39	22	16
7.14	"	26°	21°	29°	36°	21.5°	36°	34°	21°	36°	29°	37	39.5	22	14.5
7.15	"	25°	22°	29°	32°	22°	35°	30°	22°	32°	24°	35	37	19	15
7.16	"	28°	23°	27°	35°	24°	36°	33°	22°	32°	24°	38	39	19	16
7.17	"	26°	21°	29°	32.5°	24°	36.5°	33°	22°	32.5°	24°	34	37	21	20
7.18	晴	25°	22°	29°	30°	22°	32°	29°	22°	28°	27°	36	37	21	20.5
7.19	"	25°	21°	26°	30°	22°	32°	29°	22°	28°	27°	30	32	23	20
7.20	曇	24°	20°	25°	30°	22°	32°	26°	21°	24°	22.5°	32	33	20	18
7.21	"	18°	16°	20°	19°	17°	17°	18°	17°	17°	17°	19.5	18	18	17
7.22	雨	19.5°	18°	20°	19.5°	18°	19°	19.0°	18°	19°	17°	22.5	20	14.5	13
7.23	晴	19.5°	19°	20°	21°	19.5°	20°	18°	17°	17.5°	17°	22	23	13	12
7.24	晴	23.5°	19°	25°	34°	26°	35°	30°	22°	32°	24°	36	36	13	11
7.25	晴	24°	20°	25°	34°	25°	35°	28°	21°	30°	23°	36	36.5	18	15
7.26	晴	25°	20.7°	26°	34°	26°	36°	30°	22°	31°	23°	36	37	15	14
7.27	"	25°	21°	27°	32.5°	25°	34°	28°	21°	29°	23°	37	36	18	15
7.28	"	24.5°	20°	27°	34°	24.5°	35.5°	30°	22°	32°	23°	37.5	37	19	16
7.29	"	25°	19°	26°	34.5°	24°	35°	26°	22°	25°	23°	37	37	18	16
7.30	"	23.5°	18°	25°	30.5°	23°	32°	22°	19°	24°	23°	31	33	19	18
7.31	雷雨														

最後に一言指導教官として附加さして戴きたい事があります。夫れは岡山醫大學生諸君の體力、團結力、勇氣等の優秀な事であります。私が出發に際し最も心配してゐましたのは學生諸君の健康及び團結に就てでありました。未知未經驗非文明の奥地に於て果して充分健康を維持する事が出来るであらうか、或は2箇月の長期間一致團結困苦に堪へ得るであらうか、可成心配致して居りました。併し之等は全くの杞憂に過ぎませんでした。出發に當り私は各自充分自重し自分勝手の行動に出ない様、殊に生水は決して口にしない様禁じました、學生諸君も私の意のある所を汲んで良く服従して呉れました。粗食、濁水に良く堪へ誰1人病氣に倒れるもの無く一言の不平不満も無く努力して呉れました。この點私の大いに感謝してゐる所であり岡山醫大學生の誇でもあると考へる次第であります。

顧り見ると僅か2箇月ではありましたがこの間種々出來事を経験しました。殊に赴いた土地がソ聯との國境であり獨ソ戰の開始と共に豫期しない本件にも遭遇致しました。次に最も印象の大きかつた日の日誌の1頁を書いてこの報告を終りたいと思ひます。

7月8日 晴

午前11時頃 ゾングルマン國境警察官がソ聯の

密偵を發見、之を捕へんとして交戦數時間途に日系警察官1名戦死との無電あり、アルタイムン警察本隊は俄然色めく。伊藤公醫急救品を積み「トラック」にて現場に急行す。尙ほソ聯機の飛來頻りとの無電が各所の國境警備隊より入る。午後8時頃遺骸を乗せた「トラック」歸る。全員整列して之を迎ふ。遺骸は蒙古草原唯一の花、興安樓(ノモンハンの勇士等により命名されしと聞く)に包まれ安置さる。一同勇士の冥福を祈り通夜を行ふ。花々しく戦場の鬼と化し靖國の御社に日本の守護神として永へに日本國民の尊崇を受けるでなく、唯黙々々國境の警備に任じ果敢なく散つた一警察官の身を考へ言ひしれぬ寂しさを感じると共に此處にも美しい日本精神のある事を發見して胸に熱いものの湧くを禁じ得なかつた。余は參事官と學生今後の所置に就き懇談す。現在の所擴大の恐れなき模様との意見にてこの儘驅微仕事を續行する事とす。萬一に備へ學生引擧げの爲常に「トラック」ト臺を基地に待期させる事とした。流石に今日1日は國境第一戦にあるの緊張感あり、國際關係が直接ピンピン自分の身邊に感じられる。

擱筆するに當り今回我々の滿洲行に際し種々御世話に與かつた新京、ハルビンの先輩諸兄に厚く御禮申し上げる次第です。